

紹介

亀田俊和著

『観応の擾乱』

室町時代を二つに裂いた

足利尊氏・直義兄弟の戦い』

観応の擾乱の通説は、佐藤進一氏の研究を前提とする。佐藤氏は、足利尊氏が主従制的支配、足利直義が統治権的支配を行うことを提示し、初期室町幕府の体制を「二頭政治」と評価した。このように権限を明確に区別して示したことに意義がある。そして尊氏の執事高師直は直義の権限拡大に反発し、尊氏方と直義方で対立が表面化した。そこに南朝の動向も相まって、足利氏の内紛に留まらない全国規模の内乱へと発展していくという構図で観応の擾乱は描かれることが多い。しかし実際には個人の利害関係が複雑に絡み合っている。これを「二頭政治」を前提として、二項対立的に説明しようとするために、この図式に当てはまらない当該期の実態は捨象されてしまう。また史料的には軍記物語である『太平

記』に依拠するところは大きく、史料の信憑性にも注意せねばならない。このような状況の中、本書は通説を再検証し、絡み合った事実や人間関係を紐解いた。

亀田氏は、これまでは個々の人物を重視して研究を進めており、『高師直』（吉川弘文館、二〇一五）など、人物の動向に焦点を当てて、当該期を論じることが多かった。このような人物に焦点を当てた個別研究も進展が期待されるころではあるが、これまでの研究の中で個別に明らかにされていた人物の動向を結合させ、それらを南北朝期、観応の擾乱の中に位置づけた点が本書の魅力であるといえよう。

本書は「はしがき」、「あとがき」を除き、七章構成であり、通時的に論が展開される。第一章「初期室町幕府の体制」では、観応の擾乱を理解するための前提として室町幕府成立の契機である中先代の乱から歴史を論じ、尊氏、直義、師直の権限を概観する。

第二章「観応の擾乱への道」および第三章「観応の擾乱第一幕」は、四条畷の戦いから高一族の殺害までが通時的に論じられ、観応の擾乱の道筋が示される。特に第三章

では引付方の復活や寄合方の登場といった制度的側面、地方での戦乱の状況、細川頭氏に代表されるような、これまであまり注目されることのなかった武将にも目を配りつつ、論じていることが特徴的である。

第四章「束の間の平和」では、尊氏と講和中の直義の政治を「失政」と評価する。制度面では、直義に反発する義詮が御前沙汰を開いたことで中世訴訟制度が変質するとし、これを室町幕府体制の画期であると位置づけた。

第五章「観応の擾乱第二幕」を前提として第六章「新体制の胎動」が論じられる。直義の死去を狭義の観応の擾乱の終結と捉えるとともに、これがむしろ室町幕府にとつての戦いの端緒であると評価する。そして足利直冬が尊氏に敗戦したこと、南朝の入京が最後になったことなどを挙げ、幕府を揺るがず戦いは終焉したと、この時期を位置づけた。

終章「観応の擾乱とは何だったのか？」ではここまでの論を総括しつつ、観応の擾乱以後の政治にも言及する。近年注目される災害史の観点も取り入れており、興味深い。

本書は通説や分析概念に斬新に切り込みながらも、最新の研究動向にも目を配っている。それとともに、その時々的情勢で動く人々の様子を子細に描いており、亀田氏のこれまでの研究成果が随所に反映されている。書店などでは話題の本として取り上げられ、一躍、脚光を浴びている。一般読者の注目度の高まりとともに、今後の南北朝研究の進展を期待したい。

(新書判 二八八頁 二〇一七年七月)

中央公論新社)

(板谷寿美

京都大学大学院文学研究科修士課程)